

まし埋やちよ

No. 21
千葉県八千代市
埋蔵文化財通信
2009. 6. 30.

おおびた遺跡特集

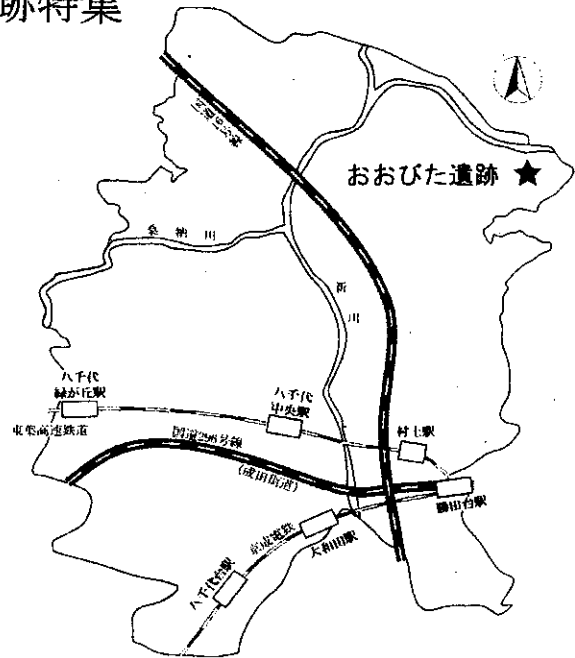
八千代市の保品地区には、プラネタリウムや自然観察のできる「八千代市少年自然の家」があります。今回は、平成7年に「八千代市少年自然の家」増築工事に先立って調査された、「おおびた遺跡」について紹介します。

【おおびた遺跡の位置】 おおびた遺跡は八千代市の北東部の保品地区に所在し、佐倉市などの市境に近い台地上に立地する遺跡です。少年自然の家とその周辺の台地上が遺跡の範囲となります。遺跡の標高は約20mで、眼下の水田とは、15m程の高低差があります。遺跡の北側・東側は水田地帯がひろがり、田植えの時期などは、稲と林と空の見事な景観を眺めることができます。開発が著しい市内の南部に比べ、印旛沼周辺に近い市内北部は、遺跡が残されている地形そのものを実感することができます。

【遺跡の概要】 おおびた遺跡は、少年自然の家を建設するのに先行して発掘調査が昭和50年に行われています(a地点)。範囲は、現在の建物部分や県道からの出入り口部分などであり、平成7年はa地点に隣接した範囲の調査を実施しました(b地点)。おおびた遺跡は、a・b地点の他に、「埋やちよ」No.2で紹介されている平成10年のc地点で調査が行われており(現在、整理中)、3地点の調査から、部分的に遺跡の様子が分かってきました。

おおびた遺跡は、縄文時代～中世に至る複合遺跡で、中でも弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした遺跡です。a・b両地点の調査により判明した遺構は表や地図のとおりですが(次ページ参照)、時代順にその内容を見ていきたいと思います。

縄文時代 縄文時代の早期後半の条痕文系土



器(約7,000年前)から縄文時代後期(約3,000年前)までの土器が出土しています。比較的条痕文系土器と中期の土器が多く出土し、人々の生活の痕跡が確認できました。市内でも珍しい縄文時代初頭(約13,000年前)と考えられる石槍(いしやり)が1点出土しており、遺跡が狩猟空間であったこともわかりました。

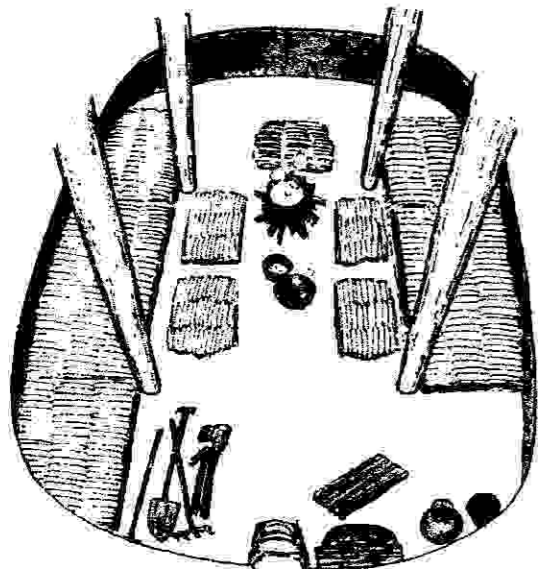
弥生・古墳時代 遺跡を色濃く特徴づける時代となります。弥生時代後期の竪穴住居跡1軒、古墳時代前期の竪穴住居跡7軒が調査されました。また、古墳時代後期の円墳が1基調査され円筒埴輪の破片が出土しています。市内では弥生時代後期から古墳時代前期まで続く集落遺跡が多く、おおびた遺跡もこのタイプの遺跡に当てはまります。

古墳時代は、古墳が全国的に造られる時代で、階級社会が成立し、地域をまとめる首長が出現しました。古墳で「お祭り」を行い、その際と同じ種類の土器を使う文化が各地に広がっていきます。古墳を軸とした「お祭り」を共通とす

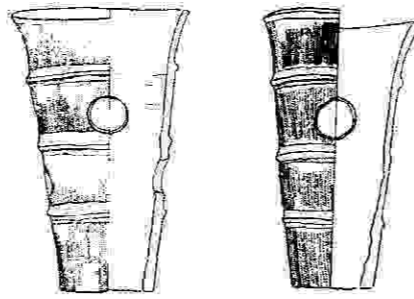
おおびた遺跡地点別遺構一覧

| 地点名 | 縄文時代 | | | | | | 弥生後期 | 古墳時代 | | | 奈良・平安時代 | 中世 |
|-----|------|------|----|------|----|----|-------|-------|----|------|---------|----------------------|
| | 草創期 | 早期 | 前期 | 中期 | 後期 | 晩期 | | 前期 | 中期 | 後期 | | |
| a地点 | 石櫛 | 炉穴1基 | ○ | ◎ | ○ | — | 住居跡1軒 | 住居跡6軒 | ○ | 円墳1基 | ○ | 土塁を確認 堀1条 土塁1条 |
| b地点 | — | ◎ | ○ | 土坑2基 | ○ | — | — | 住居跡1軒 | — | 埴輪片 | — | — |

※○は出土遺物あり、◎は出土遺物多い。



竪穴住居内部の空間利用想定図
『千葉県歴史 通史編 原始・古代 I』より転載

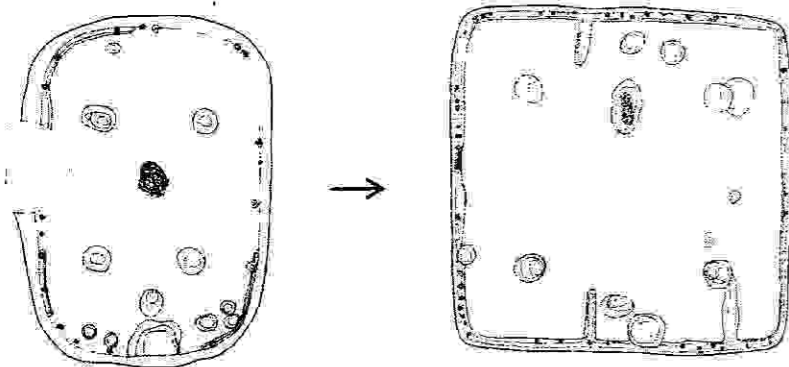


円筒埴輪 (桑納2号墳)
『八千代市の歴史 通史編 上』より転載

おおびた遺跡b地点
出土の円筒埴輪の破片
(古墳時代後期か)



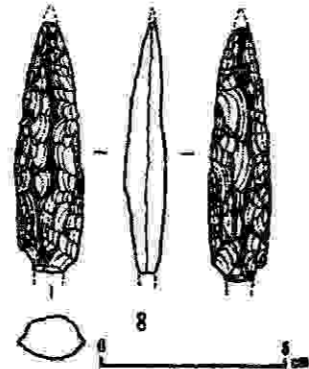
おおびた遺跡周辺地形図 S=1/8,000



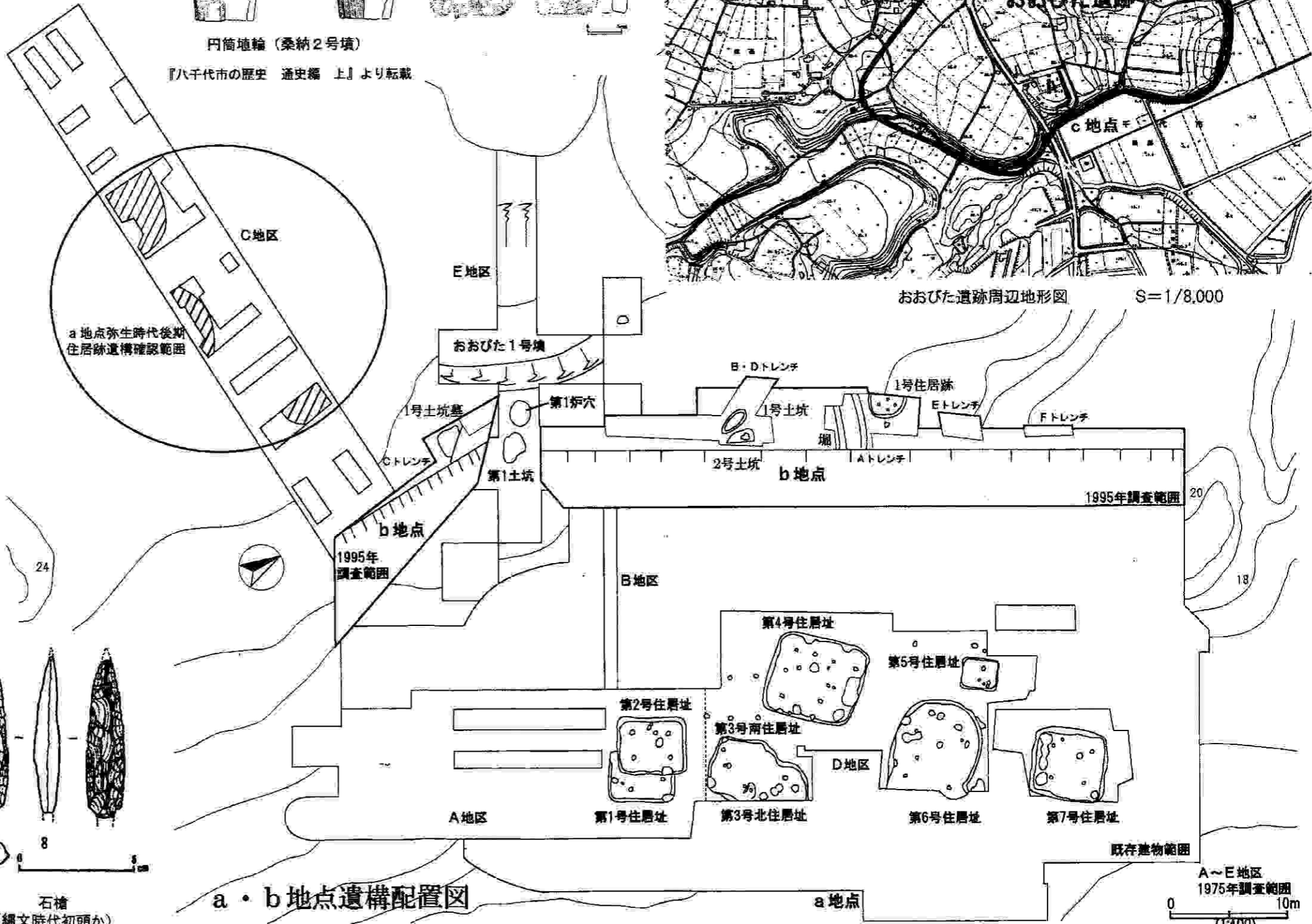
弥生時代後期

古墳時代前期

住居の形の変化
『八千代市の歴史 通史編 上』より転載

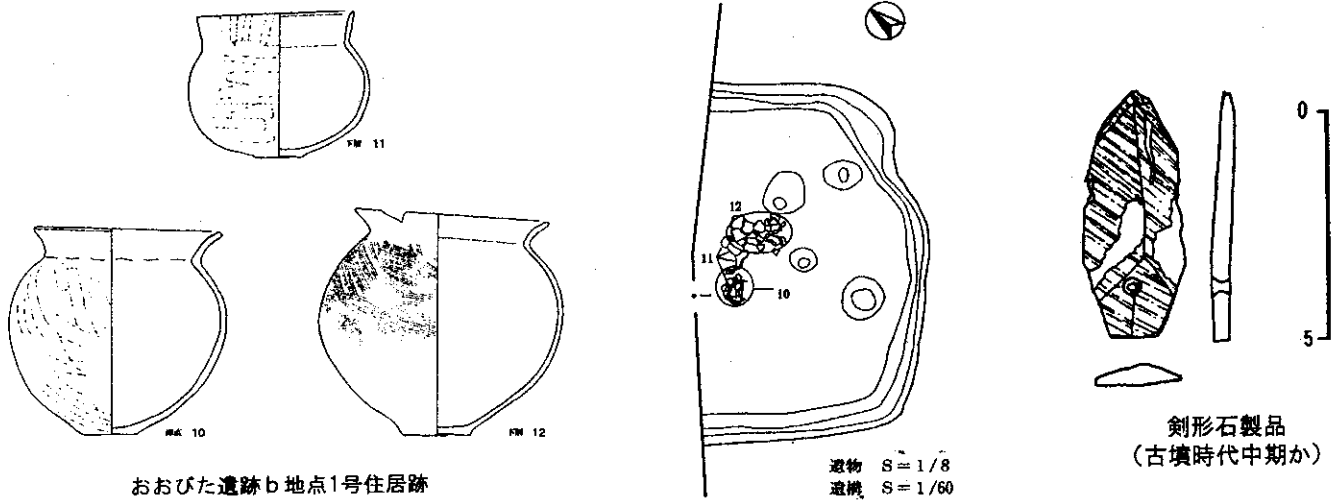


石櫛
(縄文時代初頭か)



a・b地点遺構配置図

A~E地区
1975年調査範囲
0 10m
(1:400)



おおびた遺跡 b 地点 1号住居跡

遺物 S=1/8
遺構 S=1/60

剣形石製品
(古墳時代中期か)

る文化は、集落から出土する土器にもその共通性を見ることができます。印旛沼周辺では、関西地方・東海地方・北陸地方で作られた土器が直接運び込まれたり、その土器をまねて作った土器が出土し、弥生時代にくらべると土器の種類が各段と増えました。このことは、古墳時代前期には、それまでと違って、より遠方の地方とも交流していたことを意味します。

おおびた遺跡 b 地点の 1号住居跡では、竪穴住居跡の真ん中から 3つの壺が並ぶように出土しました。住居に捨てたのではなく、住居を去る時、据え置いて残したような状況でした。古墳時代前期の竪穴住居跡では、同じ種類の土器が、住居内の一角から集中して出土することは周辺の発掘例から多く認められていました。

古墳時代前期の最近の研究と照らし合わせると、鏡や埴輪などを使用する「古墳に関わる祭祀」と、土器が中心となる「集落を主体とした祭祀」の 2つの系統の「お祭り」が同時期に存在していたことが判明しています。「集落を主体とした祭祀」は、1軒ごとの住居に住んでいた人々のつながりをあらわすと結論づけられています。おおびた遺跡では、古墳時代前期の古墳は見つかっていません。しかし古墳を作っていた人がどのように暮らしたのかを考えることができる資料が見つかったといえるでしょう。また、古

墳時代中期の「お祭り」に用いられた剣形の石製品も出土しました。

奈良・平安時代 竪穴住居跡の他に土坑墓と呼ばれるお墓が 1基、b 地点において調査されました。奈良・平安時代のお墓は、古墳の近くに作られることがよくあります。この時代のお墓にも何種類か形に特徴があり、下に掘り下げた穴の壁をさらに横に掘る独特な形状を見ることができます。古墳を神聖なものとする伝統がこの時代にも続き、古墳の近くにお墓をつくる意識が生き続いていたと理解できます。

中世 b 地点では堀 1条と土塁 1条の一部分を確認することができました。a 地点では、高さ 3~4m の長方形の土塁が、台地北端に存在していたことが記録され、b 地点の堀と土塁は、そのことを裏づける調査成果と考えられます。

以上、おおびた遺跡の調査の結果を簡単に見てみました。少年自然の家は、市内の小学生・中学生が一度は訪れる学習施設です。野外学習の時など、子供たちの明るい笑い声が聞こえます。建物の下には、弥生時代や古墳時代の人々が暮らしていたことが調査から分かりました。太古の人々も住居の中で、きっと笑いながら食事していたであろうと想像できます。

なお、出土品の一部は少年自然の家に展示してあります。 (伊藤)



—編集後記—

今回は、おおびた遺跡の整理を担当した、調査員の伊藤さんに原稿をお願いしました。今回は、昨年、島田台で調査が行われた道地遺跡及び平戸台 8号墳の特集をします。

埋 (まい) やちよ No.21

—千葉県八千代市埋蔵文化財通信—

平成 21年 6月 30日

編集・発行 八千代市教育委員会

教育総務課 文化財班

八千代市大和田 1 3 8 - 2

☎276-0045 ☎047(481)0304